

「創立125周年を迎えて」

第1回

シンポジウム

「浮世絵とは何であったか」

研究者が文化的意義や魅力を語る 浮世絵ファン200名近くが熱心に聴講

シリーズ

中央大学創立125周年企画・展示「浮世絵百華 平木コレクシヨンのすべて」と連動したシンポジウム「浮世絵とは何であったか」(文学部主催)が2月20日、中央大学駿河台記念館で開催された。シンポジウムには、江戸時代から明治前期にかけての日本文化を幅広く研究されている3名の研究者がパネリストに招かれ、浮世絵の文化的意義や魅力についてそれぞれの視点から報告。また会場に集まった200名近い浮世絵ファンとの質疑応答が行われた。

永井和之総長・学長の挨拶で開会したシンポジウムは、鈴木俊幸文学部教授の司会で進められ、パネリストの九州大学名誉教授の中野三敏氏、ロンドン大学アジア・アフリカ研究所教授のタイモン・スクリーチ氏、東京大学教授のロバート・キャンベル氏がそれぞれ報告を行った。

はじめに中野氏が、「江戸時代には人だけでなく、人間に関わるものすべてに身分がありました」などと述べて、「江戸文化の身分制」について解

説。そのうえで、江戸時代の文化を「雅」(メイソン・カルチャー)と「俗」(サブ・カルチャー)との2つに分ける考え方を紹介し、「最も『俗』で、文化の中では下位にあるが、それゆえに人間味溢れるもの」として浮世絵が江戸時代の人々に広く親しまれたことを報告した。

続いてスクリーチ氏は、浮世絵に描かれた絵と詩を資料に、江戸から主要な遊郭であった吉原に行く客の「道のり」について説明。浮世絵は「旅人が道を進むに連れて少しずつ変わってゆき変貌する感覚をパロディー化して創り出していたので

はないか」との見解を示し、「冬の情景が描かれた浅草の絵は『死』を、桜の花など春の風物が描かれた吉原の絵は『往生』を表しています」などと解説した。

最後にキャンベル氏が、浮世絵に描かれた吉原から見えてくる近代日本について報告。明治維新の文明開化を契機に、吉原がむしろ再生して好景氣を迎え、「当時は文化・ファッシヨンの発祥の地でした」と説明した。そのうえで、当時まだ著名な人物でもほとんど描かれることのなかった油絵に、有名な遊女がモデルとして描かれたことや、明治5年に「学制」が公布されて間もなく吉原の郭内に小学校がつくられたことなどを例に挙げ、

吉原が世相を吸収しトピックを取り入れ融合させる「近代文化の基盤」であったとの見解を示した。

パネリストによる報告後は、討議に移り、来場者から質問を受けて、活発な意見交換が行われた。最後に鈴木教授が「きょうは結論を出すのが目的ではありません。浮世絵を見る参考になさってください。」とシンポジウムを締めくくった。

シンポジウムには多くの浮世絵ファンが集った

(学生記者 廣瀬功一 文学部3年)

